

---

# 榎凪といっしょ！あーるっ！

椎堂 真砂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

榎凪といっしょ！あーるつ！

### 【Zコード】

N1970E

### 【作者名】

椎堂 真砂

### 【あらすじ】

剣野景色と僕があつてから三年と半年。ようやく元の生活へ戻り、僕は榎凪達と騒がしくも楽しく暮らしていた。そこへやつて来た『恩人・弓削水豹』と涼暮市で起きた至上最悪の凶悪犯罪『連続殺戮事件』。僕は、そして榎凪の日常は……『西宮東×椎堂真砂による『榎凪といっしょ！』続編！』毎週土曜日定期更新。\* 7/2 1から8/3まで作者の予定がたてこんでいるため、一時的更新を凍結、代わりに書き貯めてある別作品を7/20から投稿しますので、よろしかつたらそちらをどうぞ。

## 序（前書き）

この小説は西宮東著・『榎廬といつしょ！』の続編です。一応、前作を読まなくても話が通じるようにはしていますが、過度の前作ネタバレはしない予定なので、バックヤードが知りたいと言つ方は前作をどうぞ。

さくり。

人を裂く感覚はあまり手にまとわりつかなかつた。

昔自分の手首を切り裂いた感覚とはまた違つ、他人の皮膚を切り、肉を裂き、骨を断つ手応え。

直に伝わる感触。

直に伝わる感覚。

何もかも、真新しい。

脳髄が蕩けそうなほど鮮烈で、脳髄が焼ききれそうなほど悪寒がする。

僕は間違いなく人を殺した。

僕は間違いなく命を奪つた。

殺害しつくした。

略奪しつくした。

そう、僕は言い訳の余地もなく、自分以外の他人というやつを殺した。

それがこれから先、僕の人生にどんな影響を与えるかは、この熱気と悪寒にまみれた頭じゃ考えもつかない。

でも今、僕が他人を殺したという事実はかわらない。

罪悪感で首を締めるには十分な事実。

いや、行為と言うべきなのかもしれない。

僕が他人を殺したという行為は未だに誰も知られていない。

当たり前だ。

僕がそう仕組んだんだから。

僕がそう計画したんだから。

誰にも邪魔されないように殺すため。

誰にも知られず首を刈り取るため。

他人に観測されていないなら、これはまだ事実じゃない。行為だ。行為を嘘で隠して、事実を変えてしまえば良い。

そうすれば、これは僕だけが知っている行為だ。主観的なもので、決して客観的な事実じゃない。

そもそも、僕がなぜ人を殺したのかと言えば、やむにやまれない事情がある。

でも。

でもだからといって、人を殺したことの仕方ないなんて言えない。人を殺す以外にも、解決方法はあった。むしろ、人を殺す解決方法の方がが多い。だから仕方ないなんて言えない。

仕方ないなんて言いようがない。

僕は間違えたのだ。

完膚無きまでに間違えたのだ。

間違えようもなく間違えたのだ。

だからこれは贖罪。

これは人を殺した事への購い。

殺された人のために書いた、僕の日記。  
殺人鬼の書いた『殺人日記』。

## 序（後書き）

西宮東著『おまけ・続編開始までの経緯（電話編1）』

ジリリリリ……

ガチャ

西宮『あ、椎堂さんのお宅ですか？』

椎堂『間違い電話です』

西宮『椎堂さんのお宅ですよね？』

椎堂『御用のある方はその思いを胸に秘めたまま、墓場まで行ってください』

西宮『椎堂さんはオタクですか？』

椎堂『違います』

西宮『毎回毎回電話かかってくる度に否定するのやめてくれね？』

椎堂『それは私に何も語るなと？』

西宮『普通に話そーザ……』

椎堂『と、いうわけでこんばんは、西宮君』

西宮『ようやく挨拶をくれてありがとうございます、椎堂』

椎堂『それで、一月一日の忙しい夜に何ですか？』

西宮『俺には正月と言つ概念は無いから関係ないね』

椎堂『去年、正月だから除夜の鐘をつきに行こうと言つた人とは思えないセリフですね』西宮『いや、それ俺じゃないから。確かに同じ人じゃないから』

椎堂『むう……』

西宮『で、用事なんだけど……』

椎堂『西宮君は決定的に私の期限を損ねたから、大抵の要求は通らないと思つといいでですよ』

西宮『……器量ちいせえ……』

椎堂 マサト

ガチャ  
ツーツーツー

この世の中には六つの魔法が存在する。

一つ目の魔法 《才能》。

二つ目の魔法 《虚偽》。

三つ目の魔法 《空間》。

四つ目の魔法 《欠落》。

五つ目の魔法 《存在》。

そして、六つ目の魔法 《人間》。

誰にも知られていない、魔術で組上げられた、誰にも使えない魔術の魔法。

魔法使いにして世界最高の魔術師、秋宮榎凪が編み上げた、絶対無二の魔術。

僕 秋宮世界を作り上げた、無機物から人間を作り出す大魔術。

他人の再現不可能な、大魔術。

榎凪が僕を作り始めた理由は、僕にとってとてもなく悲しくて、

とてもなく痛々しかつたけど、今では納得している。

そのつもり。

「セイ」

「はい？」

「セイ」

何より、今の榎凪はしっかりと僕を見ててくれている。

何より、今の僕はしっかりと榎凪を好きでいる。

僕は榎凪と一緒に離れていたが、それでも僕らはちゃんと繋がつ

ていた。

切れることなくしつかりと。

三年という月日ですり減らないほどに。

約三年半前、切れそうになつたけれど、それでもちゃんと繋がつたままだつた。

「セエーイイー

「だから、何ですか？」

三年もの間、僕らは離れていた。

その三年間にあつた出来事を、再開して半年経つた今でも僕は話せずにいる。

榎凪も僕に聞いてこない。

それは僕を信頼してくれているのかもしれないし、単純に気にかけてくれていらないだけかもしれない。

僕としては、前者であつてほしい。

そう信じたいから、僕も榎凪の三年を聞かない。

榎凪の事を信じているから、榎凪の三年間を聞かない。

気になるけど、気にしないことにした。

「セイイー

「な、なんですか！？ いきなり抱きつかないで下さい！」

広い玄関ロビーを掃除していると、背後から唐突に抱き締められた。

こんな風に何の不安もなく抱きつかると、逆に後者なんじやないかと思えてくるけど。

それと一緒に、僕もどうでもよくなつた。気にしないことを、気にしなくなれる。

「だからって頬擦りしないで下さい」

「だからって何だよお～！んう？恥ずかしーのかあ？相変わらず可愛いーなあー！食べちゃいたい！いや、むしろ食べられたい！私をたべて？」

そう言つて、後ろから抱き締めている手をより強くする。

ひたすらに僕を触り、僕を抱きすくめる。

まるで三年間なんて無いよう

変わつた」と云ふが、

「いい加減、頬擦りを止めてください！それと  
にするのはどうかと思うんですよ、僕は」  
「シンデレラ～！シンデレやつほお～い！  
「意味分かりませんし……」

僕自身が照れるようになつたことと、

「カアーナアーギイー！」  
「きやははははははつー！」

葵と茜が僕らの間に割つて入るつとする」とぐらうだ。

精神的に大助かりの助つ人だ。

榎凪の場合、最近一人の制止がないと、榎凪は際限無く僕と身体的接触を図ろうとする。

その、先も。

「昼間つから何じくをつむやつてるんですかっ！？義兄さんと…」  
「そおーだ、そおーだ！」

そういうて、ホームラン予告のように檀風にバットを付きつける。最初の頃はあの太刀で一人を止めようとしていたが、檀風が夜中にこつそりと回収して以来、いつぞやのバットで襲いかかってる。

生身の檀風からしてみれば、僕らの一撃は何にしたって当たれば必殺のようなものなんだけれど。

葵にしたつて茜にしたつて僕にしたつて、ナリは小さいが魔術で作られた、戦える体なんだから。

僕は無機物から作られた有機物として。

葵と茜は人間から組み替えられた有機物として。

それぞれ、元々は無い命。

昔からタブーとされてきた、神の作っていない命。四年前に作られたときと同じまま。

何も変わっちゃいない。

葵は淡い青の浴衣に青い髪と青い瞳。

濃い赤色の髪と瞳を持つ茜は黒い布地に白いフリルだけの服をまとっている。

身長も何も変わっていない。

肉体的に成長したのは、いや、成長し続けているのは僕だけだ。

それが作られ方による違いなのかどうかは、僕以外に比較対象がないから分からぬ。

分かる必要もない。

「いい加減、はあーなあーれえーろおー！  
「いやあーー助けて、セイイー！」

ちつとも助けが必要じゃなさげに叫んで、僕の後ろに身を縮こませより強く抱きつく。

まるでただ抱きつくための口実のよつこ。

実際、ただの口実なんだろうけど。

だからといって、このままスピードの乗った一撃を頭に食いつのは全く持てこめんなので、反射的に白刃取り。

白刃なんて何処にもついていないけど。

結果に大差無い。

どつちにしたつて葵相手なら瀕死の重症だ。

でもとりあえず何とか葵を止めるることは成功。

「に、義兄さん！？」

「……葵はもうちょっと周りを考えて行動しようつな

「い」めんなひやい

」のタイミングで噛むとは思わなかつた。

その所為か、顔を赤らめて恥ずかしがる葵に、ふつと頬が緩んだ。

「私を差しあいて萌えてもらおうなど444億年早いわ！」

「わひや！？」

葵の行動になごんでいる間に、いつの間にか榎凪は葵の後ろに回り込んでいた。

回り込んで取り押さえるくらいならまだ可愛いげがあると言つものだが、榎凪がその程度で留まるはずもない。止めよつと思つたが時既に遅し。榎凪は既に行動につつっていた。

「よつこ…」

「わひや…」

つんざくよくな悲鳴。

耳鳴りがする。

悲鳴のあまりのインパクトに思わず怯んでしまった所為で何が起  
こつたのかいまいち分からなかつた。

が、榎凪の普段の行動や葵が胸の辺りを必死に押さえている状況  
から察するに、榎凪が後ろから葵の浴衣の帯をほどいた模様。

「うおつりつあ！」

「いや、ちょ、まつ、かーつ！」

それから間髪入れずに頭をガツチリホールドし、そのまま適当な  
部屋めがけてリリース。榎凪の手から離れた葵はよく分からない悲  
鳴を上げながら飛んでいった。

葵の飛んでいった部屋から物がたくさん割れるような音がしたが、  
その後のことは考えると鬱になるので思考停止。

「トドメ！」

「留めをとして何する気ですか！」

僕の制止も聞かず、榎凪は葵を投げ入れた部屋に向かい走り込む。  
僕も榎凪をつかんで止めようとしたが間に合ひはずもなく、榎凪  
は扉の前に到着。

本当に命に止めをさすよくな真似はしないだろうが、無用に怪我  
人は出したくない。

それに家が荒らされれば、掃除といつツケが必ず僕に回つてくる。  
止めないわけにはいかなかつた。

「おうりあああつ！」

「ストオオオップ！」

無視。

完膚無きままでに無視。

そのまま部屋に突入り魔力の籠つた一撃をみまつ  
や、普通に扉の前で立ち止まり、ドアを閉めた。

「あ、あれ？」

慌てて僕も立ち止まる。

何をするかと思えば、おもむろに懷から一枚の紙片を取り出すと、  
ドアの真ん中辺りに張り付けた。

それだけし終わると、一仕事終えたみたいな爽やかな顔をしてド  
アから間反対に離れていった。

「さ、セイ、デート行くぞ、デートかっこハート

「かっこハートとか言つのは止めてください」

「んじや、かっこハート？」

「いりません」

「かっこモナムー？」

「かっこの中にいちいち文章を入れないでくださいよ

「えー、私の愛だぞ？」

全然悪びれた様子もなく、楽しそうに笑つている榎風。

そんな榎風に向も言つことができず、僕は頃垂れながらため息を  
ついた。

このまだどんどん不毛といふか非生産的といつかな話題がグ  
ダグダと続きかねなかつたので、話題を変える。

「榎風、さつきのは？」

「私の愛についてか？いくらでも語つてやるぞ？ん？なんなら夜に  
ベッドの上で」

「つー？」

僕は自分でも顔が赤くなるのが分かったが、構わず榎凪の言葉に自分の言葉を重ねる。

「じゃなくてつーさつきのドアに貼つた奴ですつ！」

「ドアに愛情は貼つてないが？」

「愛から離れてください！紙ですよ、紙！ペーパー！」

「ははっ、分かつてる分かつてる。ムキになつて本当にかわいいなあ」

榎凪は僕に手を伸ばして、頭を撫でようとする。

そのまま撫でられると通例の「ことく話がグダグダとなるので僕は一步下がつて避けた。

すると榎凪は何事もなかつたかのよつて「歩近づき、左手で首をからめとるようにして僕を胸に埋めた。

普通に恥ずかしい。

そんなことは我関せず、むしろ喜ぶように嫌らし笑みを浮かべながら、榎凪は僕の質問に答えた。

「あれはな、鍵だ」

「鍵、ですか？」

「ああ、どんな扉にでも使える万能魔術鍵だ。私謹製のな。いや、汎用性を魔術式に組み込むのは苦労したよ」

榎凪の謹製となると、世界中の研究者が渴高く金をつんでも欲しいような代物だ。

僕にそういう価値は分からなければ、少なくとも一千万円は下らないだろ？

「くらべなんドアに使っても、お金がそれでは実用性は皆無だが、

研究対象としてこれ程有益なものはない。

いわば、ブラックボックスなのだ。

榎凪が滅多に魔術式を売らないというのも、値段に拍車をかけているのだろうが。

「因みに、頑丈性も抜群だ。外から剥がさない限り、何があつても絶対に開かない」

ドアの鍵、一千万円。

僕の貞操、プライスレス。

お金で変えない価値があるつ！

「これで思う存分イチャイチャラバラバ出来

「アナタは私を封印でもする氣ですかつ！？

「ああつ！」

案の定なことを言つている榎凪の頭が、ものすごい早さで前に傾いた。

頭を思いきり殴られた様子。

「何をする！痛いじゃないか！というかお前、どうやつて部屋から出てきた！私とセイがラバラバしてる途中にこいつそり剥がして、見せつける計画が台無じじゃないかつ！」

「殺すつー今すぐ殺しますつ！」

榎凪のことを背後から殴つたのは、努髪天をついた葵だった。あの状態の葵に殴られて無事なんて、とんでもない頑丈さだ。何にしろ、身体的に安全を確保できたので、葵に心から感謝しながら榎凪の腕から抜け出す。

お金で変えない価値を失いたくないので、榎凪から一歩離れる。

その時、折り紙をしている茜が見えた。  
時価一千万円以上の紙で。

茜の織り上げた紙飛行機が僕の頭にコシンと当たつてヒラヒラ落  
ちる。

茜は楽しそうに笑い声を上げた。  
その声に会わせるように、榎凧と葵の騒<sup>さわ</sup>ぎ声が近くで大きくなる。  
騒がしこことこの上無い。  
これが楽しい楽しい僕の今の日常だ。

## 一章・殺人日記 01（後書き）

西宮東著『おまけ・続編開始までの経緯（電話編2）』

西宮『いきなり切るなよう……』

椎堂『……まあ、いいですけど。で、用事って何ですか？』

西宮『いや、ぶっちゃけるとだな』

椎堂『ぶつけなければないですから、あらましだけを話しゃがりませじんちくしょう』

西宮『俺の小説の続編書いて欲しいわけなのさ』

椎堂『ええ……』

西宮『やる気ないなつー』

椎堂『だつて、続編書くとなると小説よみ直したり、設定確認したり面倒じゃないですかー』

西宮『受験勉強もしてない癖して何言いやがる。俺よか時間全然余りまくつてんじやねえーかよ』

椎堂『見えてないところで忙しいんですよ。第一、私にメリットがないじゃないですか』

西宮『そうだけども……』

椎堂『自分の小説書くだけでも手一杯なんですから、他を当たつてください』

西宮『そうか、残念だな……』

椎堂『何がですか？』

西宮『折角姉さんが直々の指名でお前の書いたやつが読みたって言ったのに……』

椎堂『姉さんって……西宮君の？』

西宮『ああ、そうだけど……』

椎堂『OK。西宮君、設定資料とか関係物全部寄越してください』

西宮『……』

椎堂『受け渡し日時はいつですかね……、翌日の午前でも』

西富『現金だなあ……』

椎堂『一途と言つて下をこ』

西富『やこですか……』

十月三日水曜日。

涼暮市の外れにある榎凧と僕、そして葵と茜を含めた四人の住む白亜の大豪邸に来客があつた。

日課となつている玄関をしていた僕が、チャイムはなつていなかつたがすぐに気付く。

勘とかそういうものではなく、足音で。

別に僕が特別感覚が鋭敏なわけではなく、この家に上ってくるためにつかう長い長い階段が足音を響かせる作りなのだ。

それだけではなく、足音の主はどうやら下駄のようなものを履いているらしく、かなり響きやすかつた。

チャイムの音がなる前に、僕は掃除用具を片付けて玄関に向かう。一応、招かれざる客の場合も想定して警戒もする。

世界最高の魔術師と言われている榎凧だ。島国の田舎とはいえ堂々と山の頂に豪邸を構えていれば当然と言えば当然すぎる可能性だ。歩いて玄関までいつているうちにチャイムがなつた。

「はーい、今出ます」

僕は警戒しながらも思わず軽快に挨拶。

……僕は警戒もできないアホの子なのだろうか。

ドアの向こうからは当然のように返事はない。でも、気配、とうか存在感は確かにある。

改めて集中しなおし内開きのドアを開ける限界の距離を保ちながら僕はドアを開けた。

「やあ、少年。<sup>マイディア</sup>久しぶりだな」

僕は扉を閉めた。

そして頭の中を整理しようと必死になる。

ドアの向こう側に立っていたのは一人の女性だ。

身長は僕より十センチ程高いくらいで160センチあるかないか。髪も瞳も黒く顔立ちも日本人らしい。

髪が短く中性的な顔立ちの所為で顔だけみると男女判別しにくいが、体の構造が明らかに女性だ。

ただ、着ているものは男物の着流しで履いているのは鼻緒の黒い下駄。

男性と女性がその人の中には混在している。

ひどく倒錯的な感じ。

それでも僕はその人を女性と断言できる。

理由なんて簡単なことだ。

その女性は僕にとつて初対面ではなく、血口紹介のときこそう聞いたから。

自己紹介を受けたのは三年も昔の話だけれど。

僕は心を沈めて、再度扉を開く。

「やあ、少年。<sup>マイティア</sup>久しぶりだな」

RPGのキャラクターよろしく同じセリフを同じように言う女性。先ほどと違うのは嫌らしい笑みを浮かべていることくらいだ。その表情を変えようとも隠そうともせず、腰の上に背筋の乗つていない奇妙な姿勢のまま僕の反応を待っている。

十秒ほど経つてからようやく我に帰った僕は、カラカラに乾いた喉で言葉を紡ぎ出した。

「ああ……ひし……さん？」

「ああ、君の慈しむべき恩人マインディアがわざわざ遠路はるばるやって來たぞ、少年」

カラソコロンカラソ。

下駄を鳴らして散歩近づく。

僕の正面三十センチ前。視界一杯に彼女の顔が広がる。その距離で彼女は手を上げて、僕の頭の上にポンと軽く置く。

「半年とはいって、本当に久しぶりだ。身長も少し高くなつて……うん、男らしくなつて結構結構」

そんなことを言いながら、僕の頭を撫でて手櫛で髪をすべ。男らしくなつたと口で言いながらも、全くの子供扱いだ。でも、榎凪と違い恥ずかしくなるよいつな扱いではなく、和むよつな感覺。

子を慈しむ親のように、その触り方は優しく、心を安心させる。

「死ねえやああああつー。」「つー？」

和やかなムードの中に突如怒号。相手は見なくとも分かる。

僕は勘に任せた咄嗟の判断で目の前の女性の手を引っ張りながら屈んだ。

直後、頭上に赤い線が通過する。

僕が黙視した限り、それは槍だった。もちろん刃付きで殺傷力抜群のもの。

避けなければ僕共々串刺しになるといひだつた。

一番危険なのは、外部の敵より槍を平氣で投げてくる榎凪なのかもしれない、心のどこかで僕は認識した。

「で、我が家に何か用かな?」

榎凪が慇懃無礼な口調で対面する水豹さんに問う。それを気にしたような風もなく、中性的な顔に嫌らし笑みを浮かべて榎凪に応じている。

「ああ、その通りだよ。さすが、希代の魔術師は話が早くていいな用事があるなら、とつとと帰れ」

榎凪はあくまで水豹さんに攻撃的な態度で応じる。さすがにそれはあんまりなので、僕は口を挟んだ。水豹さんは僕の恩人にあたる人物だ。応じてこるのが榎凪とはいえ、僕としては心苦しい。

「榎凪」

「ん、なんだ? 私を愛し私に愛されているセイ

水豹さんは自慢するかのよつて、わざわざ一語一語にアクセントをつけて喋る榎凪。

敵愾心と嫉妬心が剥き出しだった。

隠そぞうともしていない。

「とりあえず、この体勢どうにかしてもりえません?」

「無・理」

「一言でばつさり切られた。」

因みにこの体勢と言つのは、隣に座つた状態で榎原の胸に抱き抱えられると、いつとでもなく恥ずかしい体勢だ。

「少なくとも、セイと」

榎原は水豹さんを顎で指し、

「これの関係が分かるまではな」

まるで物でも見るかのように見下す。

水豹さんはそんな榎原を見て、破顔大笑した。

「はつはつは、本当に貴様は変わらんなあー。」

一瞬なんのことやらせりぱりだつた。  
が、疑問を口にするような余地を持たせずに、水豹さんは一の句を次いだ。

「変わらない貴様を見ると、本当に殺したくなるよ」  
「黙れ、とつとと帰れ。私はセイトイチャイチャするのに忙しいんだ」

水豹さんは超然とした嫌らし笑顔。  
榎原は敵意剥き出しの厳めしい顔。

本当に空気が悪い。

部屋の端にいる茜と葵が入るのを躊躇つくりに。  
いつまでもこんな重い空気を続けていい訳にはいかないので、さつき感じた疑問を口にすることにした。

「あの……」

「うん？」  
「どうした、少年？」  
「マイティアー

一瞬にして視線が僕に集中する。切り出しにくいことこの上なかつたが、ここで切り出さない訳にはいかないので思い切つて口に出した。

「二人つて知り合いなん、ですか……？」

思わず尻すぼみに。

そんな僕の態度に嫌らしい笑みを崩さずに水豹さんが答えた。

「ああ、私と榎凪はどうせ

「クラスメートだったんだよ、学校時代のな

と思いつきや、榎凪が無理矢理遮つて答えた。

「思えばあの頃は灰色だったなあ……。それを考えると今がいかに幸せか分かるよ

「やめろ、榎凪っ！さすがに頬擦りは恥ずかしそうなつ…」

「えー……」

口ではそう言つながらも、あつたり僕を解放した。

「たまには恥ずかしがるセイを……つていうのも良いなあ

訂正。

今後、何かを仕掛けてくる模様。

用心しておこう。

転ばぬ先の杖、とうやつ。

その杖で歎をついて蛇を出したことは多々あるが。

「 てるんだ」

そんな、言つてしまえばグダグダな空氣の中に、水豹さんの低い声が聞こえた。

「貴様のその『灰色の学校生活』の所為で、どれだけの人数が迷惑したと思っているんだ?」

水豹さんは嫌らしい笑みを消して、真剣な表情を露にする。僕は一度しか見たことのない、真剣な表情。

「1365人」

声を区切つて、水豹さんは明言した。

「貴様の馬鹿な行いの所為で、1365人の人間が甚大な被害を被つた。周辺のことも考えれば、おおよそ10倍に被害を受けた人数は膨らむだらう」

そんなの、天災のレベルだ。

「幸い、死人はでなかつたがな」「当たり前だ、そななるように調整したんだからな」

榎凪は自信「ありげに、水豹さんに切り返した。

そんな榎凪が何をしたか気になり、思わず横から口を挟んだ。

「榎凪、一体何やつたんですか……?」

「なあーー」

軽々しい口調に恐怖を抱きながらも、榎凪の言葉をしつかり受け止めた。

「私の通っていたドイツの魔術専門学校を一つ、この世から消しただけだ」

「私の昔話はどうでもいいんだ。ついでに水豹の言つたこの『迷惑をかけた人々』も、な。まあ、セイが私の昔話が聴きたいというならいくらでも話してやるが」

榎凪のその言葉に水豹さんは少しムツとしながらも、すぐに平静の顔にもどし、榎凪の言葉に耳を傾けた。

僕は榎凪の過去に興味がないわけではなかつたが、今は榎凪の話に傾聴する。

「で、セイと水豹、お前らはどういう関係なんだ？ そもそも水豹、お前は長期行方不明で国籍も何も無くなつてたはずじゃないのか？」  
「はつはつは、情報が古いな」

氣作さんは腕を組んで胸を反らし、豪放磊落に笑う。まるで何処かの勸善懲惡が大好きな『隠居のよう』。

「三年……いや、もう四年前と言つたほうが近いか。私は大学教授に就任したのさ。もちろん国籍もちゃんとあるぞ？」  
「お前が何処で何してようが知つたことじゃねえつての。ここでセイと一緒に余生をいちゃいちゃラヴラヴしながら過ごすんだからな」「因みに、私がいる大学は」「誰も聞いてねえつての」

適当にあしらおうとしている榎凪を余所に、水豹さんは嫌らしい笑みを浮かべながら榎凪に言った。

「アンリフルト大学」

「…………」

大学の名前を聞いた途端、榎凪の眉が微かに反応した。

そんな榎凪の反応を見て、水豹さんは面白そうに付け加える。

「分かっているとは思うが、お前が消滅させた専門学校の跡地に立てられた私立の大学だ」

「…………趣味悪い」

「何とでも言うが良いさ。これは貴様への意趣返しなんだからな。私からお前の云うところの『灰色の学校生活』でさえも奪った秋宮榎凪へのな」

相変わらずの嫌らしさ。

それを称えるような笑み。

榎凪はそれを無視するように閑話休題をした。

「で、結局お前はセイとどういう関係なんだ？」

「婚約者だ」

「ぶえつふつ！」

盛大に吹いたのは榎凪でも無ければ、勿論水豹さん本人なはずもなく、僕自身だ。

因みに、僕が吹いたのは水豹さんの妄言に対してもなく、それを信じたらしい榎凪が僕を力一杯抱き締めて、確保に走ったからだ。魔術を使いかねないほど本気。

まさしく一触即発。

このままではこの家どこのか町」と吹つ飛びかねない事態に「冗談抜きでなつてしまつので、僕が本当のことを明かすこととした。

「恩人、なんですよ

「何のだ?」

「僕が榎凪から離れていた三年間の、です」

榎凪さんは苦虫を噛んだような顔をした。

ちょうどよい機会なので、僕は榎凪に全てではないけれど、全てを話すことはできないけれど、ほんの少しだけれど話すことにした。

「僕が動けなかつた三年間、僕の世話をしてくれた人なんです

「…………ちつ」

榎凪は僕の言葉を聞いて、結構長い間黙っていた。

榎凪と水豹さんは詳しいことは分からぬが、学生時代に少なからず因縁があるみたいだし、一緒にいるだけでもあまり良い気分ではないんだろう。

そんな相手が僕の恩人だったとなれば、やはり葛藤が榎凪の中に存在するんだろう。

自分に置き換えて考えるのは僕には難しいけれど、榎凪がそれに近いことを考へているのは察せる。

だから僕は榎凪の次の反応をまつ。

結局、僕は榎凪にいつだつて従うのだ。

「…………ちつ」

榎凪はこれ見よがしに舌打ちすると、僕の拘束を解いた。そしてソファに深く腰かけると天を仰いで言つた。

「葵、客だ。茶を出してやれ」

葵の上ずつた返事が、遠くの方から聞こえてきた。

葵と茜が一人で準備してくれたお茶と茶菓子を、榎凪と水豹さんは間に漂う険悪な雰囲気の中で僕が食していると、おもむろに榎凪が口を開いた。

「お前がもし本当にセイの恩人なら……」

不機嫌そうな榎凪の声。

気のせいか、僕はその中に苦々しさのような声色を感じとった。そして繋がる言葉を聞いて、確信が持てた。

「お前がここにもつて来た用事があるのなら聞いてやらない」ともない可能性がなきにしもあらずのような気がする気分だ」

素直になれない子供が言葉を覚えて必死に本意を隠しながらもバレバレな言い回しをしてしまったかのような榎凪の台詞。

というかそのまんまだ。

そのことに自分自身でも気付いているのか、榎凪はバツが悪そうにそっぽを向いた。

水豹さんはそんな榎凪に忍び笑いで返しながら、それを決して声色に出さぬように喋り始めた。

「じゃあ、その言葉に甘えて話をさせてしまおう」

水豹さんは一度笑つよつて、ふつと息を吐く。

「私がここに来たのは他でもない、彼に会つのも一つの要素ではある

水豹さんは僕を一瞥した。

そんな水豹さんを榎凪は思い切り睨んだが、水豹さんは嫌らしい笑顔で受け流し、言葉を続けた。

「が、何分忙しいこの身だ。それだけを理由に日本は訪れられない。ここに来た今日の用事、それは 」

水豹さんはもつたいたつけるように一つ間を置いてゆっくり瞬きをしてから、自分の言葉を疑うように確かめながら言葉を発した。

「 秋宮榎凪、貴様に殺人の嫌疑、及び警察への協力要請が出ている。私は警察庁への出頭、及び協力要請の通達へ来た」

殺人容疑。

協力要請。

僕の中で渦巻く、水豹さんの口から生まれた二つの言葉。確かに榎凪は疑いようもなく、誤認しようもなく『殺人経験者』ではある。が、それは別に怨恨や金銭、衝動などの人間の本質的な欲求にかられてしたわけではなく、殺しにきた相手を殺し返した、というものだ。

しかも殺人を行つたのは法律の整つていらない、文字通りの無法地帯だ。そんな場所でなければ相手は手を出しそうがないし、法律外での調整もちゃんと行つている。

殺人という『罪』はある。

法律という『罰』はない。

『罰』を与えようがない『罪』なのだ。

殺伐とした話ではあるが、事実ではある。

「受けんな、そんなどいつも良い話。私にあるのは聞いてやる義務程度だ」

榎凪はその言葉の下に水豹さんの要求の一切を斥けた。

榎凪の国家とか行政がからんでるときの『デフォルト反応』だ。

別に権力に対する恐怖とかではなく、本当にただ『何となく』でその反応。

真実かどうかは知る由もないことだが。

「例え、それを貴様が仕事としてもつてきたとしても、な

「…………」

「私は仕事を受ける必要もなく、金は有り余ってるからな。普通にセイと暮らすにはもう仕事をする必要はない」

沈黙する水豹さんに対し、言い訳じみたそんな言葉を次いだ榎凪。確かに普通に生活するなら仕事をする必要はないだろうが、誠に残念な事に榎凪が普通に生活できるはずもない。

恐らく20年後には財産が尽きる。

もともとあつた財産はこの邸宅に大部分を費やしてしまったし、それでも豪勢にぐらして20年もつのだから、榎凪の財産が化物じみていることを再確認した。

でも確かに、20年はもつのだ。

今すぐ仕事しなければならないことはない。

水豹さんの頼みであれば聞きたいのは山々なのだが、榎凪が聞くつもりがないなら僕がこれ以上何か言つつもりはない。

『恩人』の水豹さんには悪いが、僕のプライオリティは榎凪の方が上なのだ。

僕のやっていることは、果たして榎凪を優先しているかどうかと聞かれれば、疑問を懐かざるをえないのだが。

「さあ、貴様の用事は済んだだろ？何ならもう一度答えてやる。  
殺人嫌疑については、嫌疑じゃなくて確証にして、証拠付きで出直  
してこい。協力要請は却下。以上」

「…………」

「まあ、セイを救ってくれたことは感謝してるさ。立ち寄るくらい  
は許可してやる！」

早くも追い出しモードに入っている榎風。

流石にゆっくり話する時間くらいは与えてほしいと思いつつ口を挟も  
うとした瞬間、水豹さんが言葉ぼそりと呟いた。  
僕らを硬直させるに十分な言葉だった。

「『理由なき剣』」

ぱつりと。  
はつきりと。

「」の話には『理由なき剣』が関わっている可能性がかなり高い

そう水豹さんは呟いた。

21。

陰惨なんて言葉じゃ生温い。

19。

残酷なんて言葉じゃ程遠い。

38。

煉獄なんて言葉じや嘘臭い。

合わせて78。

此処はまるで世界から欠け落ちた、なんていうチープな表現で型にはまつてしまう光景。

21。 19。 38。

合わせて78。

僕はこの瞬間、その数字が大嫌いになつた。

聞くだけで怖気が走る。

耳に届くだけでこの光景を思い出す。

「お 、ええ……っ！」

僕の後ろで誰かが吐いた。

連鎖的にせり上がつてくる吐き気。

こんな光景、慣れる方が狂つている。

それでも僕は吐くことはない。吐いてはいけない。

僕の吐き気の分は後ろにいる誰かが吐いてくれる。

落ち着け、僕。

冷静になれ、僕。

僕は榎凪の恋人だ。

こんな所で失態を曝すわけにはいかない。  
。

……。

「酷い、光景ですね  
「ああ、そうだな」

やつとの思いで絞りだした言葉に、横に並んだ榎凪が平然と答えた。

内心、平然としていないのかもしれないが、少なくとも完全なる平然さを取り繕つて僕に応じている。

僕なんかとは比べ物にならない胆力。  
もしくは、狂氣。

あの飄々としている水豹さんでさえも、僕らの後ろで言葉を失っている。

それほど迄に凄まじい景色。

赤に染まつた大地。

紅一色の木々。

他の色の余地が無いほど、朱に埋めつくされた空間。  
深緑の森に現れた、血色の一点。

21。

19。

38。

合わせて78。

21人。

19人。

38人。

合わせて78人。

まさしく地獄絵図。

まさしく死山血河。

まさしく『連續殺戮事件』。

一回目の殺戮では21人。

二回目の殺戮では19人。

三回目の殺戮では38人。

合わせて7~8人が三回の殺戮、たった三日間で殺された。

人のしたこととは到底思えない。

人出来ることとは到底思えない。

「で、私に何をしろって？」

濶んだ空氣と重たい沈黙の中、榎凪は振り返って水豹さんに不機嫌そう尋ねた。

「まさか、犯人見つけてこい、なんて探偵の真似事させよいつてんじゃないだろ？」

「あ、ああ……」

これだけの光景を目の当たりにしながら、普段と一切変わらない榎凪に水豹さんは面をくらつていいようだった。

が、それを理由に榎凪の質問に答えない訳にもいかず、吐き気を押さえるように口許を軽く押さえながらポツポツと喋りだした。

「そんなこと、せんでも良いわ……」

「んじゃ、何をせようって？『アレ』が関係無いんだつたら下ろさせてもうひつで。こんなところにいたら服に臭いがついて仕方ない」

他人が何人死のうが榎凪には一切関係無いことのよう、そうあしらつた。

「何より、セイの精神衛生上、悪すぎる」

「大丈夫だ。お前にやつてもううのは、そんなものではない。『ソ

レ』に『闇』して『る』可能性は、十分にある

『よいよ吐き気が堪えられなくなつたのか、指が食い込むほど口を強く押さえ、水豹さんは身をくの字に曲げた。

僕としては衝撃的な光景だ。

約二年を通じて、ここまで弱つている姿は見たことない。暴力にも恫喝にも一切屈しなかつた水豹さんが、自分の目に映つた光景のみで、ここまで弱つてしまふなんて、思いもしていなかつた。

「とつとと答える、水豹。無駄に時間をとらせるな」

弱つている水豹さんに對し、一切の同情をかけずに高圧的に榎原は問いただした。

無理もない。

別に榎原は冷酷さだけをもとに『こんな』とを言つてはいるんじやない。

『アレ』が関わつていて、氣が立つてはいる。

そして、焦つてはいる。

『アレ』の存在が榎原を焦らせてはいる。

「そう、難しいことじやない」

水豹さんは一通り落ち着くと、体を起しはじめて喋り出した。

「この、事件、手がかりだらけだが、一つ分かつてない、ことがある

いくら落ち着いたといつてもこの状況下だ。まだ喋るには辛そうだった。

「まずは犯人。この現場で一切、直接的な証拠が見つかっていない」

当然といえば当然。

犯人が分かれば事件が解決といった単純な話ではないが、事件が解決するには犯人を見つけなければいけない。

必要条件だ。

「これは複数犯の可能性を含め、警察が、人海戦術であたっている。これだけ人を、殺したんだ。どこかに、綻びがあるさ。お前らに頼みたいのは、もう一つの」

水豹さんは吐き気を堪える一拍を置き、僕らにようやくながら用件を言った。

「凶器の特定。これがやつてほしい事だ」

ここで僕らの関わった事件 というにはあまりにも規模の大きすぎる出来事について、僕の知っている知識を整理しておこう。

まずこの出来事、『涼暮市連續殺戮事件』の概略。

その名前から分かる通り、涼暮市の山の中腹で起こった連續殺戮事件だ。

連續殺戮。

連續殺人ではなく、連續殺戮。

一回目の殺戮では21人。

二回目の殺戮では19人。

三回目の殺戮では38人。

合わせて被害者は78人。

三度連續した殺戮。

とても浮き世離れした出来事。

山中で起こったということから目撃者は今のところ見つかっていない。

若しくは、目撃者と一緒に殺されたか。

どちらにせよ、犯人の手がかりは今のところ皆無。

これはまだ殆ど捜査が行われていないからでもある。

これだけの大人数が殺されたのだ。そう開けつ広げに捜査を行うわけにもいかないし、犯行自体が見つかったのが昨日だから仕方ないと言えば仕方ない。

これが一つ目の謎。

一つ目が僕らの任された、凶器が何なのか。

たつた78人殺すだけでも十分に狂氣の沙汰だが、それだけでは飽き足らず、この犯人はある行動をとっている。

首切り。

斬首。

78人、一人残らず首を切り落としている。

被害者の秘匿が目的なのはまずない。

首を切り落とした程度で隠せるとは思わないし、78人の首を切り落とすという手間を考えにくく。

そして何より、切り取られた首はこの場に残っている。

まるでゴミでも扱うように、首が山を成して放置してある。

約80人もの首。

狂気の歪なモノメント。

それに78人も殺しておいて、秘匿も何もあつたものじゃない。推理小説に出てくる入れ替えのトリックも考えにくい。

第一、ああいつたものは短時間の間だけ、孤島の中だけ、という条件のものが多い。

一步条件の外から出てしまえば、成り立たなくなる。

話が逸れたが、問題は凶器がなんなのか、だ。

前述通り、被害者は例外なく首を切り落とされている。

今のところ、死体の腐敗具合や血液から見るに、おおよそ最初の殺戮から二日程度、だそうだ。

一人の首を切り落とすのに約一時間程度かかったとするとき、全員で約80時間。

80時間、首を切り続けなければならない事になる。

二人、三人と犯人を増やしていくが大差はない。犯人の狂気に大差はない。

犯人を増やした分、隠蔽に時間がかかる。

極端な話をしてしまえば、犯人を78人に増やして首を切る時間を78分の一にしたところで、露見しないように隠していたらいくら時間があつても足りない、という話だ。

そこで目が向けられたのが、魔術と言うわけか。

そして、魔術と言えばこの近辺に世界最高の魔術師がいる。

榎凪のところに来るのは当然のことか。

大雑把に言つて何でも切れる『アレ』を作つてているのも一つの要

因だろう。

魔術を使うにしろ、『アレ』を作り直して使うにしろ、一番可能性が高いし。

話題は変わるが、そもそも、78人も殺されておいて、何故、一回目が21人、二回目が19人、三回目が38人と言えるのかと言えば訳はちゃんとある。

いくら血の乾き具合が分かるとは言つても、この人数だ。流石に個人個人を判別することは難しい。

正規の鑑定をするにも昨晩見つかつたばかりで全員をするのは無理だ。

それでも、僕らは分かつた。

簡単なことだ。

犯人が教えてくれた。

それだけのこと。

何とも丁寧な事に、死んだ日付別に死体を分けていた。挑発か、それとも必然的な理由があつたかは分からぬ。でも、僕らにはどうでもいいことだ。

「さあ、始めよるぞ、セイ」

僕の隣に立つ女性は言った。

「探偵、この時間だ」

この場に不釣り合いな晴れやかな笑顔を浮かべて。

「探偵、ひつこ、ですか」

僕は思わず榎凪に聞き返した。

「ああ、探偵、ひつこだ」

鸚鵡返しの質問に鸚鵡返しの応答。  
会話として不毛すぎると。

「考へても見る、セイ」

僕が意味を思い悩んでいると、榎凪が補足を始めてくれた。

「今のところ分かっている情報は、鋭利な刃物、程度のことだぞ？  
凶器のみだけを見つけるなんて出来ると思うか？」

「言われて見れば当然のことだ。  
いくら僕でも察しがつく。」

「要は、私たちは『アレ』を餌に捜査の歯車に組み込まれそうにな  
つていて」と言つことだ

僕が察しがついたのは榎凪にも分かっただろうが、わざわざ誘い  
出した本人の前でそう言つた。

張本人である水豹さんはと言えば、僕らの後ろで現場から目をそ  
らし、必死に嘔吐感に耐えていた。

声をかけても今は氣を使わせるだけなので放つておくれ」とした。

「そう判断がついた以上、それに参加してやる理由も義理もない  
「え？ 何でですか？」

思わず僕は口を挟んでしまった。

「まだ『アレ』が関わってる可能性はゼロじゃないんじゃないですか？」

「そこで探偵ジャッキー、パート一だ」

榎凪は得意気に鼻を鳴らして、腕を組み、胸を張つて語りだした。

「まず第一に、『アレ』がこの世に存在する可能性が極めて低いこと」

確かに『アレ』とその持ち主はあの日以来、まったく姿が確認されていない。

『失敗作』たるあいつが言つていたように僕が消滅しなかつたようには、『失敗作』が消滅していない可能性だつて十二分にある。

それなのに未だ見つかっていない『失敗作』。

麻紀さんはまだ探し続けていると大地さんが言つていたが、見つかったという報告は受けていないらしい。  
だからこれは単純に確率の話。

「第一に周りに被害が無い」と

「関係あるんですか、それ？」

「ああ、勿論。決定的にな」

榎凪は自信満々に語り始めた。

「『アレ』は元来、対大人数、対建造物を目的として作ったものだ。だから基本的にはリーチという概念がない。どれだけリーチを絞つても10メートル程度が限界だ。だから、『アレ』は一人を切るのにはかなり難儀だ。まあ、実際切る理由を持った時点で使えないからリーチを絞ることも無理に等しいことなんだがな」

自信満々なのは当然か。  
作つた本人だし。

「当然、同じ高さの背の人間を並べれば同時に刈り取ることは可能だが、その際確実に周囲に何らかの痕跡ができる。たが、周りを見てみろ」

僕は首を見回す。

三日前の殺戮の痕跡。  
一日前の殺戮の痕跡。  
一日前の殺戮の痕跡。  
三日分の殺戮の象徴の生首の山。

そして、赤いペンキをぶちまけたように真っ赤に染まつた森と地面。  
その所為で判別しづらかつたが、確かに森や地面には痕跡が一切見当たらなかつた。

「第三に、これが決定的なやつだが 」

僕が納得したのを確認して、榎凪は次の説明に入った。

「 切り口があまりにも無様すぎる 」

榎凪は視線を下にずらし、顎で死体を指す。

「私の作った『理由なき剣』がそんな無理矢理切り取つたような切り口になるものか」

榎凪は再度鼻を鳴らして、腕組をほどいた。

「これで探偵、ひつこパートーの終了だ」

榎凪は踵を返して、死体の山に背を向ける。  
この状況下で饒舌に話す榎凪を、まるで化物でも見るかのような  
に見る警察官たちの視線と、榎凪の視線が交錯する。  
確かに化物然とはしているが。

「さあ、セイ。帰るぞ」

榎凪は僕の手をとり、山道に入つていく。

「おいー。」

呼び止める水豹さんの声も片手でいなし、僕らはその場を後にした。

僕らの家に続く長い石段を上る途中、僕は榎凪にずっと疑問に思つていたことを尋ねた。

「榎凪」

「どうした？」

僕の手を引きながら前を歩いていた榎凪は、僕の呼び掛けに立ち止まつて振り返る。

「一つ、訊いてもいいですか？」

「一つと言わざいへんでも訊いていいぞ。ただし

榎凪はベタつくなつうな笑いを浮かべ、余つた方の手を僕の白い髪の上に乗せた。

「質問の回数×十秒間のハグは譲れないな

「……」

相変わらず過ぎる榎凪だった。

あんな光景を見た後だと言うのに。

飽きれ混じりに僕はため息を吐くと、榎凪の言葉を聞かなかつたことにして質問をした。

「探偵（ひ）ひー、続くんですか？」

「おしつーはずー個（つ）ー！」

質問したら恥ずかしげもなく僕の頭に乗せていた手でガツツポー

ズする榎凪。

本当に精神年齢が掴み難い人だった。

未だに行動が掴めない。

榎凪は一頻り喜んだ後、ようやく返答を始めた。

「続けるぞ」

答えたのはそれだけ。

いつもなら頼んでもないのに、沢山喋ると言いつのひに不思議に思いながらも僕は会話を続けた。

「だからわざわざパート1なんて言つたんですか？」

「まあ、そうだな」

まだだ。

別に心此処に在らずとか、返事に気が入っていないと言つわけではない。

だが、回答が素つ氣なさすぎる。

「あの……榎凪？ 訊いていいですか？」

「構わないぞ」

「もしかして、怒つてます？」

「いや、全然」

「機嫌が悪かつたりは……？」

「むしろ機嫌がいいくらいだ」

「本当ですか？」

「本当だ」

「本当の本当にですか？」

「本当の本当に、だ。いくらなんでも心配しそぎだ、セイ」

榎凪は笑顔でクシャクシャと僕の髪を撫でた。

手を繋いでいる以上逃げようもなく、でもされるがままなのも恥ずかしいので、顔だけを離しながら喋る。

「でも何ですか？」

「何がだ？」

「もう『アレ』が関わっていなことは分かったんですね？」

「まあな。私の目は節穴じゃないからな」

ならば、榎凪が『探偵』になどする必要などどこにもない。

『アレ』が関わっていない以上、僕らが首を突っ込むべきではないのだ。

「どうした、セイ？」

「いえ……何でもないです。『アレ』が関わっていないのに、わざわざ関わるなんてどうしたんですか？」

「んー……」

榎凪は手をピタリと止め、思案するよつに空を仰いだ。

抜けるよつな青空。

雲一つ無い快晴。

『連續殺戮事件』など、そもそもなかつたかのよつな平和さだ。

「興味本意だな」

榎凪は言った。

「仮にも私は魔術師だからな。魔術師という人種は難問には興味を引かれるものや」

他人の命などどうでもいいかのようだ。

榎凪が建前でも、弔いのため、などと口にするとは思っていないが、じつ隠せざる言ひのはどうかと思つ。

「まあ、下手したら『アイツ』が関わっているかもしれないからな」

「『アイツ』ですか？」

「ああ、お前もよく知つて『アイツ』だ

僕の知つている人間なんてたかが知れているが、それでもピンと当てはまる人が思い至らなかつた。

「アレだけの人数を殺したんだ。おのずと方法も、それができる人間も限られてくる。まずはそいつから当たる」

知り合いでも容赦なく疑う榎凪。

疑うと言つよりは可能性から引かずに冷静に見ているんだろうけど。

「ところでセイ。一つ質問してもいいか？」

榎凪は突如、話のテンポを変えて質問してきた。

「それで質問は全部か？」

「ええ、まあ、そうですけど」

「そうか……」

榎凪はぐつたりと頃垂れ、目に見えて落ち込んでいた。

「まあいいか。九十秒なら上出来か

「え？」

突然、僕は榎凪に抱擁された。  
きつくなではなく、体全身で包み込むように優しく僕を抱きすくめる榎凪。

「ちょ、榎凪！？」

「九個の質問の代金だ」

それだけ短く言って、榎凪は僕を抱き締める力を少し強めた。  
それから喋ることなく、きつかり九十秒ハグされて漸く解放された。

白昼堂々、階段のど真ん中で。

いくら人通りが殆どないとはいっても、流石に恥ずかしかった。

「仲がいいことだな」

突如、上から声をかけられた。

真上ではなく、階段の上。

僕らの家がある場所から。

「久しぶりだな」

慌てて仰觀する。

そこには黒い髪をなびかせ佇む男性、人形使い『絲状災厄』希崎時雨がいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1970e/>

---

榎凪といっしょ！あーるっ！

2010年10月10日19時36分発行